

考古資料に関する記憶の継承について

木 村 淳 一（青森市教育委員会）

1 はじめに

埋蔵文化財包蔵地として登録された遺跡については、文化財保護法に基づく手続によって、必要が生じた場合、記録保存を前提とした発掘調査が実施され、記録保存と貴重な文化財資料の新たな知見を得ることとなる。

調査に従事する埋蔵文化財担当職員について、青森県では体制整備途上段階から調査に従事した第一世代の人間がここ数年で退職を迎え、青森県の考古学を長く取りまとめてきた村越潔氏が2011年に亡くなるなど、一つの区切りを迎えた状態である。

筆者は、先生がご存命の2010年の冬に青森県考古学会の新幹線開業に関連した新幹線沿線の遺跡について発表する機会があり、発掘調査された遺跡の他に、沿線では埋蔵文化財包蔵地として登録されないまま、古い文献では記録が残されている事例をいくつか知り得た。

現在の埋蔵文化財保護業務に従事するあるいは大学などで勤務する研究者・担当者の出身地は、青森県外であるケースが多く、地元大学で学んだ学生がそのまま就職というケースは少ない。その意味で、元々の地理的環境や歴史的環境になじみのない人間が多いのも事実である。対象とする埋蔵文化財包蔵地に関し、地籍図等の情報を入手することがあるにせよ、検索や閲覧が難しい場合、古い郷土誌（史）料や口承の情報等に接する機会は極端に少ないことが想定される。また、近年編纂や刊行が進められている県史や市町村史などの作業のうち、考古資料については、現在の遺跡の発掘調査の結果で得られた知見を優先し、古い文献に記載された情報の洗い出しや資料のデータベース化の作業は行われていないのが現状である。

青森県考古学会が30周年を迎えた際、記念論集の刊行とともに『青森県考古学関係文献目録』として文献リストをまとめ刊行している（青森県考古学会2002）。まとめられた内容は、著者名・タイトル・刊行年等の情報については網羅されているが、記載内容についての詳細な情報は含まれておらず、デジタル化やデジタルデータの公開はなされていない。そのため検索ワードによる検索もできない状態である。さらに、タイトル中に特定のテーマに対するキーワードが含まれていない場合（本稿もある意味同様のケースであるが）、目録上で探し出すことすら難しい。場合によっては、現在の埋蔵文化財包蔵地では登録されていない貴重な情報であるのに、忘れ去られてその事実がないまま、新たな考古学的知見として考古資料が積み重なる事例すらある。世代が代わるとこのような目録があった情報でさえ、場合によっては失われてしまうことが想定される。ましてや、目録上に残らない文献などは、リスト化さえ難しい状況になることが予想される。

資料を取り扱った人の記憶は活字化されないと第三者が知りうる機会がなく、時間の経過とともに忘れ去られる。情報が継承されないままであるとその知り得た事実が闇に埋もれることとなる。

本稿では資料化されながらも時間の経過とともに忘れ去られた遺跡に関して二例とりあげ、考古資料の記憶の継承について検討することとする。

2 事例紹介

青森市高田地区のマウンド（井上久1957「先史時代の青森市」『青森市の歴史』青森市教育委員会）昭和32年青森市教育委員会刊行の市内の歴史に関する概説書P.10の「四、チャシ・館・城・古墳」という項目の中で「荒川・高田地区に古墳があるといわれがあったが、高田の俗称ゴリンモリから人骨と古銭が発見し、古銭は開元（二枚）・紹聖・洪武・永樂で戦国・桃山以後にこの地方では用いられたものであろう」という記述がみられ、不鮮明ながらもマウンドや人骨の写真と古銭の拓影図が掲載されている（図2・3）。この地点については埋蔵文化財保護の体制整備前に圃場整備が実施され、現在では平坦な土地に水田が広がり、農道や新幹線の路線が整備されている。江戸時代の紀行家菅江真澄が残した「すみか（栖家）の山」中で高田邑（村）に九十九森という土盛が田の面に並んでいるという話が掲載されている（図4参照）。

現在の高田地区の村落の位置など踏まえると、人骨の発見されたマウンドの地点より南側の場所で菅江真澄が記録した可能性は残るが、江戸時代の時点でも周辺にマウンドが築かれた風景が点在していたことは間違いないものと思われる。ただ、その範囲は圃場整備により破壊され不明である（註1）。

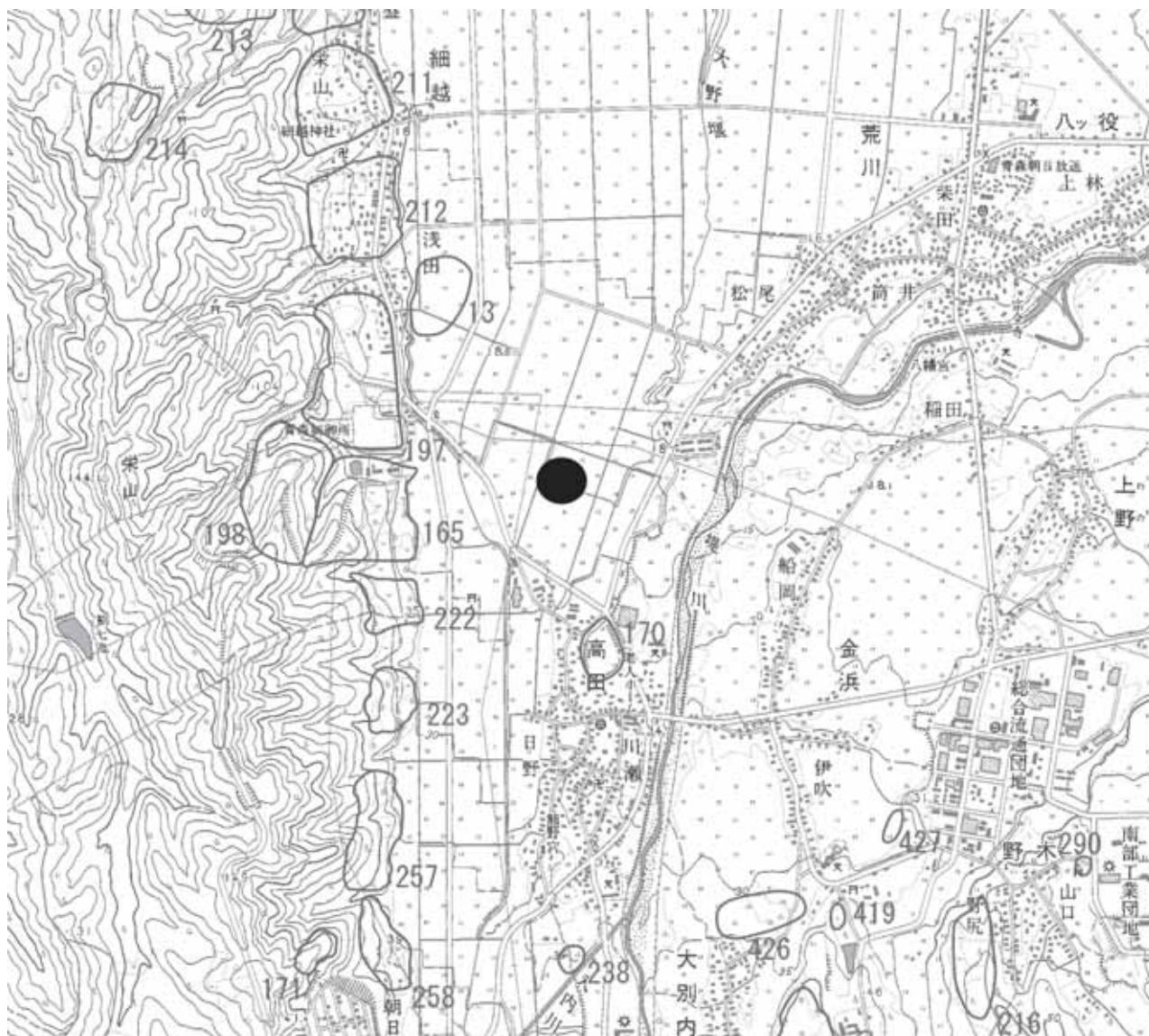


図1 青森市高田地区俗称ゴリンモリ位置図（●印）

井上1957 参照、地図は青森県遺跡地図 (<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/isekitizu.html>) の
「60 青森西部」に一部加工・加筆

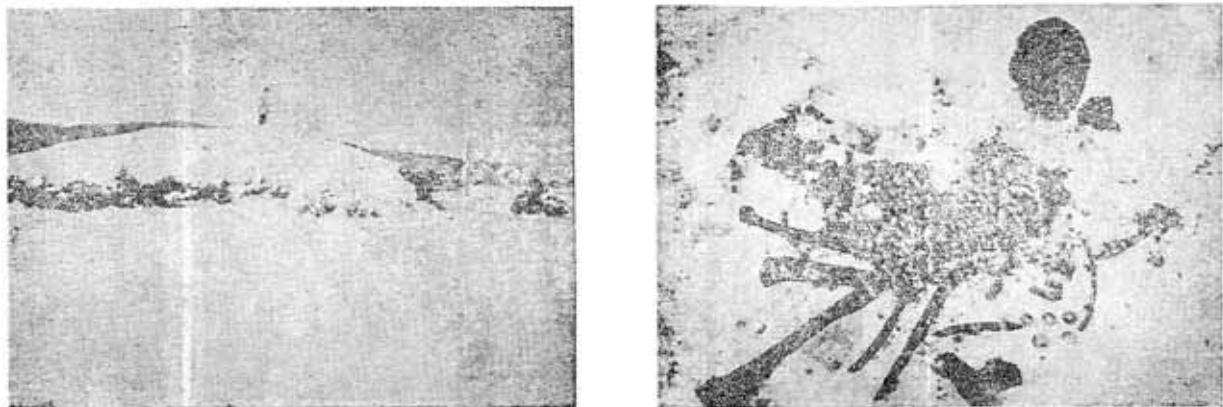


図2 青森市高田地区俗称ゴリンモリマウンド状況（左）・人骨検出状況（右）
井上 1957 から転載



図3 青森市高田地区俗称ゴリンモリ出土古銭
井上 1957 から転載



図4 青森市高田地区的江戸時代のマウンドの状況

秋田県博物館蔵江真澄資料センター 2002 から転載

平内町に所在する塚（天間勝也・鈴木克彦1977「青森県平内町に所在する塚について（一）」『考古風土記』第二号）

昭和52年に刊行された『考古風土記』第二号に掲載された踏査記録と採集遺物の紹介。「通称白狐塚（註2）と呼ばれる塚は三角点設置の際に一部削平を受けたものと推定され、塚上には川原石や割石に覆われている。採集した遺物は9点で個体としては2～3個体になる中世陶器である」という記載がある。タイトル中に（一）という番号が付され、塚の実測図等は次号という記載がされているが、以降の号で刊行された形跡が見当たらない。

出土した資料について、平泉町八重樫忠郎氏のご教示によると渥美焼の可能性が指摘され、経塚の可能性が高いとのことであった。平成25年9月に筆者と報告者の天間氏、八重樫氏等の研究者と現地踏査をする機会を得た。踏査の結果、土盛があり、記述どおり川原石が散見された。出土資料も渥美焼以外に常滑焼、宮城県水沼窯の可能性のある資料も確認され、経塚の可能性が高く、北海道厚真町で出土した常滑焼の壺に対する陸奥湾沿岸の事例としての重要性が指摘される（註3）。

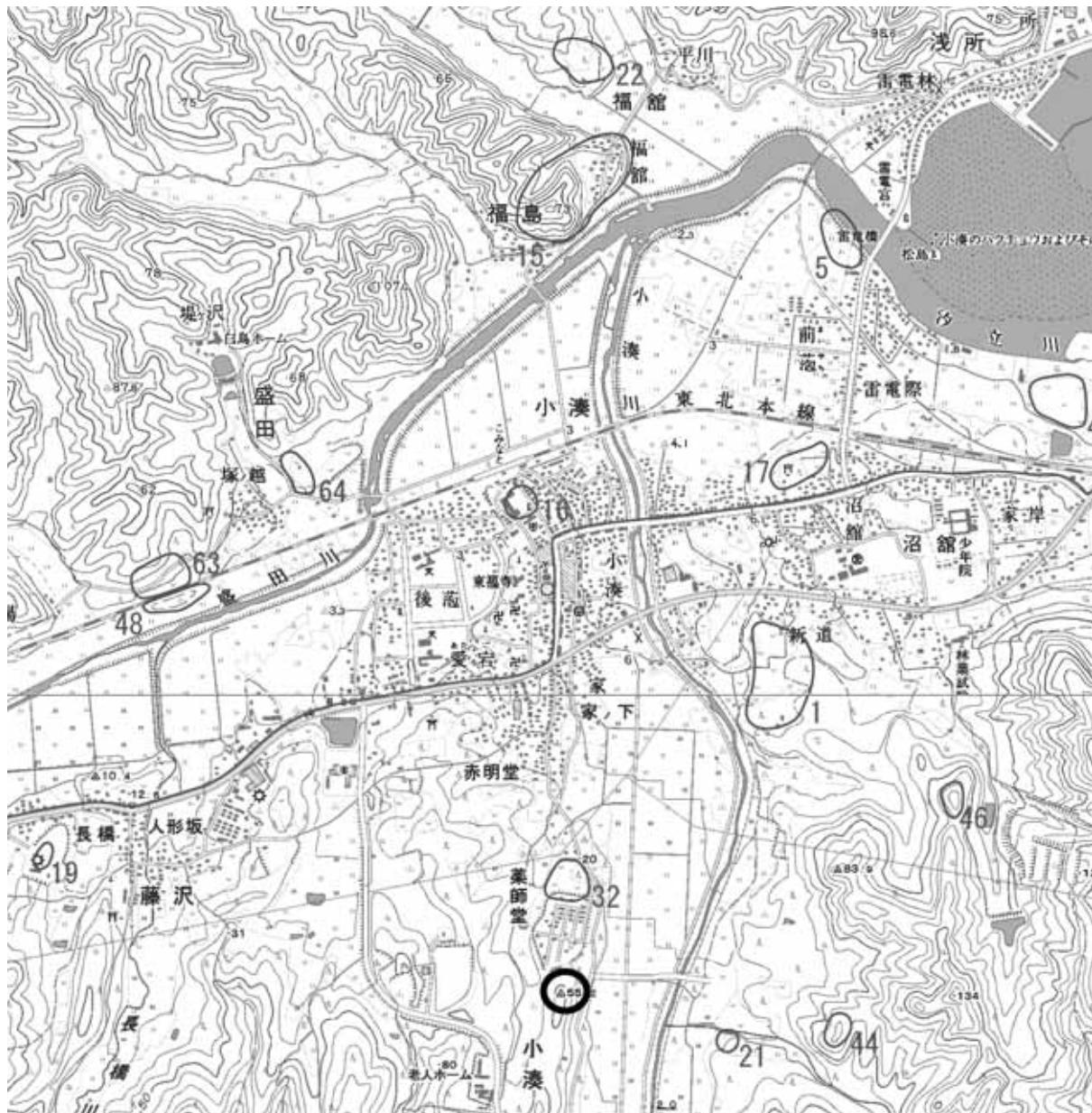


図5 平内町白狐塚位置図（○印）

天間・鈴木 1977 参照、地図は青森県遺跡地図 (<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/isekitizu.html>) の
「40 小湊」・「50 東岳」を合成し、一部加工・加筆

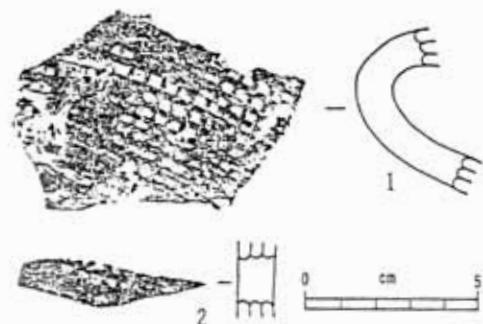


図6 平内町白狐塚出土陶器 天間・鈴木1977から転載

3 若干の検討

今回取り上げた二例は、古参の方からみると既知の話と済まされる話なのかもしれない。しかし、いずれも2013年10月1日現在、埋蔵文化財保護上の埋蔵文化財包蔵地としては登録されておらず、法律上では保護対象とはなり得ていない（註4）。このような事態の背景には登録対象から漏れた後、古い文献で、タイトルが特定の事例に対するものではないため、検索ワードがヒットせず、時間の経過とともに情報を元々知り得ている人以外は探し出すことが難しいことが考えられる。実際、近年の研究上で類例として触れられた事例は見当たらない。しかしながら、今回取り上げた情報はいずれも位置図が記載され、現在でも位置特定が可能な最低限の資料的情報が充足していた。その為、研究状況の進展に伴う再検討可能な状況下で、再び検討対象となる大変有益な考古学的資料情報となり得ている。このような情報は他にも存在し、再検討されうる資料化の作業は、自明ではあるが必要であろう。

世代の断絶や、職業としての埋蔵文化財包蔵地調査として取り扱う視座は、直面する遺跡と現在の研究状況に即した資料化に重きを置かれ、現在の調査水準で必要とされる情報の記録に努める作業が行われている。報告書や台帳に記載された保存情報以外に、調査を直接観察した人間の観察所見や聞き取りなどの関連情報も時間とともに風化し、忘れ去られる要因となる。記憶は時間とともにあやふやになり、都合良く歪められる要素もあり、情報の信憑性も薄れる可能性が高い。その意味で記録すべき時に必要な情報をしっかりと記録することの大さを思い知らされるものである。

御堂島正氏は、考古資料について「考古的脈絡に存在する人工品は、考古学的活動によって発見される。考古学的活動とは発掘調査、分布調査、伝世品の調査などで、文字通り埋没状態のものばかりとは限らない。しかし「発見」されるためにはいくつかの閑門がある。すなわち、存在していても技術的に検出できないもの、調査者の意識に上っていないものや重要でないと判断されたものは排除される。換言すれば、調査者がもっている理論と方法によって資料が限定されるということができる。さらに意識的に調査されたものであってもサンプリングエラーのために脱落するものがでる。こうして発見されたものが考古資料として認識されることになる。考古資料は一般的には時間の経過とともに情報量が減じてゆくが、必ずしも時間の深さのみが情報量の多寡を左右するものではない。」と指摘している（御堂島1991, P.656下段10 - 20行目）。氏の指摘どおり、考古資料として取り扱われる資料は取り扱う人間の認知によって左右される情報があり、その程度は一様ではなく、捨象された事項がそれ相応に存在することは否めないと考える。

近年は、インターネットなどのネットワークによる大規模な情報共有が身近になり、古今の情報やその遷移過程を大量に蓄積し、容易にアクセス・検索することも可能となった。全てを事細かに残す必要性はないが、時間の経過とともに必ず訪れるであろう価値観の転換や解釈の変容に伴い、資料の再検討が可能な情報化や古いデータの更新に努めることは必要である。また、情報共有のためにも共通の様式の整備ということが必須となる。ただ、単なる機械的な情報は無味なものになり、その時々得られた知見に関するメモや雑記などのアナログ情報でも時として有効な情報となる可能性がある。

そのような意味で幅のある情報を残す必要がある。

4 おわりに

事例紹介中心の内容であったが、埋蔵文化財包蔵地に登録されていない遺跡の情報については、他にも多数存在する。このまま県内埋蔵文化財担当機関、県史・市町村史担当部局あるいは大学機関等で資料の洗い直しをしなければ膨大な新たな資料に埋もれ、遠く忘れ去られてしまうであろう。本県では埋蔵文化財資料のリポジトリに関する取り組みも遅れ(註5)、地元に根ざした考古学という点では形ばかりの取り組み以上の整備は成されていないようにも思える。古い時代の聞き取り調査の情報や、多くを残し第一線を退いた第一世代の記憶についての情報化など従前ではあまり取り組まれてこなかった情報のデータベース化についても今後検討すべき内容であると考える。埋蔵文化財の保護は単に保存・発掘調査・調査研究・啓蒙・普及という内容のみでなく、情報を次世代につなぐ意味での情報整理・情報化という作業も必須であり、直面する問題や体制面の差があるにせよ、意見交換や事例検討が必要であると考える。

註

註1：なお、筆者は高田地区を踏査したところ高田地区の集落内に現存する熊野宮内で塚状の盛り上がりを複数確認した。また、朝日山(4)遺跡(青森県遺跡台帳番号0201-222)の東側に松ノ木神社が残存し、その部分も塚状になっている。『すみかの山』には九十九森の記事中「機織の社」という名が出ており、中に天御中主神、左にたなばたひめ、右にいざなぎの神を祀っているという記述があり、更にこの社の西北側の丘にも稚産靈神保食神を祀った「祖神堂」とよぶ祠があるという記述がある。「機織の社」相当する神社は全て現存しておらず、圃場整備で地形が改変されているが、『すみかの山』の記載内容から高田城址と考えられる「館・中野」より手前(北側)の地点であると考えられるため、高田城址より南側に所在する熊野宮周辺の話ではなく、北側の細越地区側からの地点である俗称「ゴリンノモリ」～松ノ木神社周辺のエリア周辺にかけての話と想定される。昭和50年前後の青森県教育委員会刊行の発掘調査報告書(青森県教育委員会1974『近野遺跡(1)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第12集の3頁掲載の位置図)で高田地区の高田城址の北西側には神社の記号が二ヶ所存在する。西側のものが松ノ木神社に相当し、高田城址寄りの神社が現存していないことが確認できる。

註2：天間・鈴木1977によると通称「白虎塚」とされているが、今回の踏査を契機に平内町教育委員会生涯学習課に確認していただいたところ寺島編(福地著)2009によると「白狐塚」が正式名称とのことで、埋蔵文化財包蔵地としても註4のとおり「白狐塚遺跡」で登録された。本稿でも白狐塚として取扱う。

註3：宮城県水沼窯製品の可能性は前弘前大学教授藤沼邦彦氏の鑑定による。また、北海道厚真町宇隆1遺跡から口縁部を打ち欠いた常滑壺が出土しており、12世紀第3四半期の資料とされている。<http://www.tomamin.co.jp/2011t/t11030301.html> 等

註4：白狐塚については、踏査の結果を受け、県文化財保護課・平内町教育委員会生涯学習課に報告し、埋蔵文化財包蔵地[名称：白狐塚(びやっこづか)遺跡青森県遺跡台帳番号301-067]として平成25年11月6日に登録された。青森市高田地区は圃場整備により破壊され、残念ながら包蔵地登録は難しい。

註5：そのような中、島根大学附属図書館が主導する全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトは平成25年10月9日付け(青森県教委からの通知:平成25年10月21日付け)で、全国の都道府県・市町村単位での参加を呼びかける依頼を行った。青森市教育委員会ではこれまで市ホームページ上で部分的に公開していたが、平成25年10月24日付けで参加した。全国遺跡資料リポジトリ(広域版)<http://rar.nii.ac.jp/>上で公開されている。

引用参考文献

青森県考古学会2002『青森県考古学会30周年記念青森県考古学関係文献目録』

秋田県立博物館菅江真澄資料センター2002『影印本 栖家の山(写本)』

井上久1957「先史時代の青森市」『青森市の歴史』青森市教育委員会pp.1-15

寺島満穂編(福地勤著)2009『平内町の縄文時代』

天間勝也・鈴木克彦1977「青森県平内町に所在する塚について(一)」『考古風土記』第二号pp.66-67

福田友之 2008『私の考古学ノート - 北の大地と遺跡と海にひかれて - 』弘前大学教育学部考古学研究室OB会

御堂島正1991「考古資料の形成過程と自然現象」『古代探叢 - 早稲田大学考古学会創立40周年論集 - 』pp.651-668

末筆ながら本稿作成に際し次の方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である(順不同・敬称略)。

天間勝也・寺島満穂・遠藤正夫・工藤清泰・藤沼邦彦・八重樫忠郎・羽柴直人・小松隆史・岩田安之・業天唯正・蝦名淳次・佐々木悟